

# 森を歩き、酪農作業を行って 自然を「体験」するだけでなく 考え、共有し、発見する環境教育

「環境教育」が  
なかった時代から

夏になると、涼を求める人びとが各地から訪れる清里高原。この地のシンボルともいえる清泉寮は、戦後まもなく、アメリカ人のポール・ラッシュ氏が、実践的な理想の農村コミュニティ作りを目指して設立したキープ協会が運営している。

1980年、大学卒業2年後の川嶋直さんは、東京から清泉寮にやって来た。まだ日本に「自然学校」というものがほとんどなく、「環境教育」という言葉も知られていなかったころ。川嶋さんは「ここに自然教育の場を作りたい」と考え、自然学校づくりに情熱を傾けた。

モデルもない中、アメリカの国立公園等で行われていた自然体験プログラムに刺激を受けながら、試行錯誤を重ねた。そして85年、多くの人の協力のもとに、宿泊型の自然体験プログラ

ムを開始した。この分野のパイオニアの一人である。

川嶋さんが始めた環境教育事業は、今やレンジャー（自然案内人）18名に、実習生8名を加えても回しきれないほどに。子どもから大人、環境教育指導者までを広く対象にして、森歩きや酪農体験など、数え切れないほどたくさんのプログラムが提供され、「自然体験」を軸にした環境教育が行われている。

自然の面白さは  
言っても伝わるものではない

「ここで環境教育をずっと続けてきて思うのは、『言ったら伝わる』というのは間違いだということ。『聞いたら忘れる。見たことはちよつと思ひ出す。体験したことはようやく理解するけれども、いちばん身につくのは、自分が発見したこと』というイギリスの諺がありますが、まさにその通りだと感じます」

しかし、自然についての話をしたり、実際に森を歩いたりする体験を提供することはできて、参加者自ら発見する場を作っていくのは、なかなか難しい。そのため、川嶋さんは、発見のきっかけ作りを、数多く考え出してきた。

例えば、夜の森を歩くプログラムでは、参加者たちに、こんな体験をしてもらう。

「まっ暗な森に入ると、だんだん目が慣れて、周りが薄ぼんやりと見えてきます。懐中電灯なんて持っていないかなくても歩くことができるんだ——これが最初の驚きです。しばらく歩いて目が慣れてから、片目を手でふさいでもらって、もうそくをとみます。そうすると、開いているほうの目は、もうそくの明るさに慣れていきますね。そこで、もうそくをフツと吹き消して、周りを足でさわって、もうそくと、暗くて何も見えなくなっている。次に、それまでつわっていた方

の目で見てもらうと、もうそくの明るさを体験していないから、周りの樹々がはっきり見えるんです」

自然の暗闇で、見えることと見えなくなることをめぐる驚きと発見。きつと忘れることはないだろう。人から聞いたことは違う、「体験」の強さを知る川嶋さんならではのプログラム作りだ。

「教育とは、コミュニケーションだと思っただけです。僕が何を言ったかではなく、何が伝わったかが大事です。教える相手に何かを埋め込むのではなく、何かを引き出していく作業。それは、やる気だったり、関心だったり、能力だったり……」

自然のスペシャリストであるだけでは、自然教育はできない。人に自然の面白さを教えることとはどういうことか、川嶋さんは20年以上も考え続けてきた。

体験だけで終わらせない  
プログラム作り

キープ協会の環境教育プログラムは、「自然体験」を軸とするプログラムだが、実は、「体験」だけで終わらせないことが特徴でもある。

「僕たちのプログラムは『D』

財団法人キープ協会常務理事(環境教育事業部担当)・立教大学大学院特任教授

# 川嶋直さん

かわしま・ただし 1963年、東京都調布市生まれ。

1984年にキープ協会がネイチャーセンターを開設した当初から環境教育事業を担当。

以後二十数年にわたって、環境教育や、その指導者養成に携わる。著書、共著に「就職先は森の中 インタープリターという仕事」、「日本型環境教育の提案」、「環境教育の試み エコロジーキャンプ」、「野外教育入門」など